

## 「野球と棒球」——白球がつなぐ日台百年史（後編）

ジャーナリスト、大東文化大学特任教授 野嶋 剛

日本と台湾との間での野球をめぐるおよそ百年の交流史というテーマについて、「上篇」では戦前の状況を、「中篇」では戦後の1960年末までの状況を、それぞれ資料と現地取材に基づいて書かせていただいた。連載の締めとなるこの「下篇」では、1960年代末から1990年代までを主なターゲットとして引き続き論じていきたい。

筆者としては、本来の構想では、日本でプレーした台湾選手と台湾でプレーした日本選手に対して集中的にインタビューを行い、両者の体験をクロスさせることで戦後の日台野球交流の姿をできるだけ正確に把握したかったのだが、あいにく、新型コロナウイルスによる行動制約で、その計画は来年以降に先延ばしせざるを得なくなった。そのため、この「後篇」では主に公開資料をもとにその実相に迫ってみたい。

最初に触れておきたいのは、王貞治・現福岡ソフトバンク会長（1940～）に関することである。王貞治という偉大なベースボールプレーヤーの存在自体が、戦後の日台野球交流のなかで、極めて重要な意味を持つ。王貞治は、「起点」であり、「結節点」でもあったからだ。

よく知られているように、王貞治は中華民国籍を保有している。父親の王仕福（1901-1985）は浙江省青田県四郡という農村で椿油を作る農家の息子として生まれ、青年期に日本に渡った。東京都墨田区で中華料理店「中華五十番」を経営し、日本人の妻・登美と結婚し、王貞治ら5人の子供を育て上げた。家族全員、台湾での生活経験は一切ない。王家は、1945年以前から台湾にいた本省人でもなければ、1945年以降に中国大陸から台湾に渡った外省人でもない。

王仕福は中華人民共和国籍だが、日本人の妻と王貞治など4人の子供たちは中華民国籍を取得し

ている。このあたりの経緯は謎に包まれており、王貞治自身も当時、王仕福が何を考えて家族に国籍選択をさせていたのか詳しくは語っていない。

王貞治が中華民国のパスポートを取得したのは1961年だったとされる。巨人の米国キャンプにあわせて中華民国在京大使館で手続きを行った。当時は中華民国が日本にとって中国の合法政府だった。日本から野球という仕事で米国に行くには、中華人民共和国の旅券ではうまく進まない可能性も考慮されたという見方もある。

### ●巨人の主力＝「愛国華僑」に

1958年に早稲田実業（早実）高校から巨人に入団した王貞治は2年目からレギュラーに定着、1961年の中華民国旅券の取得あたりから一本足打法を身につけて、長距離打者として一気に開花の時期を迎える。1962年には本塁打王と打点王を獲得し、長嶋茂雄（1936～）と並んで、名門チームの押しも押されない主力選手となった。

そのころから、中華民国籍を持っていても中国語も台湾語も話せない王貞治が「愛国青年」「愛国華僑」として、その政治的な利用価値を蒋介石・国民党政権に見出されることになる。当時、日本における台湾出身の華僑は、王貞治、ジュディ・オング（翁倩玉、1951～）、囲碁の林海峰（1941～）が「華僑三宝」と呼ばれており、台湾社会でも英雄扱いを受けて台湾への「帰国」時にはニュースになるほどだった。

筆者には、王貞治と台湾に関する二つの体験があった。一つは、大人気漫画『巨人の星』の読書体験である。おそらく小学校時代に読んだはずだが、王貞治が台湾を訪問しているところが描かれており、忘れられないシーンだった。改めて、本

稿の執筆にあたって王貞治の台湾訪問が描かれる講談社漫画文庫版4巻、5巻を読み直した。

日本航空727便に乗った星飛雄馬ら巨人一軍メンバーは台北の松山空港に到着。長嶋、金田正一(1933-2019)らの名選手を差し置いて、王貞治だけが熱烈歓迎を受けていた。「歓迎日本巨人棒球団来華」という歓迎の言葉が分からずに首をひねる主人公の星飛雄馬に対し、ライバルで同期入団の速水という俊足の選手が「高卒は学がない。台湾では野球を棒球という。台湾のことをまた中華民国という」と教えていた。王貞治の一本足打法が「稲草人式(案山子スタイル)」と台湾で呼ばれていることも印象深かった。

もう一つの経験は、蒋介石総統が当時、王貞治に結婚相手を紹介しようとしていたというエピソードを、台湾政府の対日仕事を担当していた人物から10年ほど前に教わったことだ。王貞治の相手として白羽の矢が当たったのは、当時、人気タレントとして売り出し中だった張美瑤(1941-2012)という女性で「台湾第一美女」とも呼ばれていた。1965年に王貞治が初めて台湾を訪れた時、蒋介石は彼女を王貞治に紹介し、結婚をもちかけて自らが仲人をするとまで申し出た、という話だった。当初は半信半疑だったが、2005年ごろに台湾での報道でこの話が事実であったことが報じられ、驚いたことがあった。

私が話を聞いた台湾政府の担当者によれば、当時、蒋介石に対して、王貞治は堂々と「私には心に決めた人がいます」とその場で断ってしまったという。この1965年の台湾訪問では、王貞治は蒋介石、宋美齡夫人と会見しただけでなく、華僑が与えられる最高勲章である「海光奨賞」を受けている。その翌年には、王貞治は結婚した日本人の妻・恭子を連れて台湾を訪問し、再び、蒋介石と面会している。

日本野球を席卷する王貞治の登場に台湾社会は熱狂し、やがて巨人軍そのものを台湾に誘致するムードが生まれる。実現したのは1968年。筆者

が読んだ「巨人の星」で描かれた巨人軍の台湾キャンプだった。

当時、巨人は川上哲治監督(1920-2013)のもと、V9の途上にあって全盛期を迎えていた。その巨人を台湾に引っ張ってくるため、日本の中華民国在京大使館、台湾の僑務委員会は総力を挙げた。特に重要だったのが巨人の正力亨オーナー(1918-2011)への働きかけだったという。蒋介石と盟友関係を結んでいた岸信介(1896-1987)の口添えもあった可能性も高いと思うが、現状では明確な史料がない。

いずれにせよ、期待通り、1968年の巨人台湾キャンプは大反響を巻き起こし、キャンプ地の台中と台北で三度の練習試合を一般公開し、数万人の観客が押し寄せた。王貞治はそれぞれの試合で本塁打を放って人々を喜ばせている。蒋介石ら台湾の指導者は台湾社会における「野球」の影響力に目を見張ったに違いない。

「中篇」で言及した台湾の少年野球・紅葉小チームが、日本のリトルリーグ関西代表チームを大差で破って台湾を歓喜させる半年前のことだった。台湾における野球熱の熱量は、巨人キャンプによってすでに醸成され、紅葉小の勝利によって火がついたと考えることもできるだろう。

### ●台湾について明言しない王貞治

王貞治自身が、台湾問題をどう考えていたのか、明瞭に語られたことはない。すでに述べたように、父・王仕福の国籍は中華人民共和国で、その人脈も同郷の浙江省出身者が中心であったとされている。王貞治自身も、台湾に関わりを持つようになる前には、台湾問題についてほとんど意識していなかったと思われる。たとえば、近藤唯之『王貞治物語：ホームランに賭ける闘魂』(1966、徳間書房)という本には、王貞治のエピソードとしてこんな話が紹介されている。

王貞治は中学校3年のとき、地元の進学校であ

る都立墨田川高校受験を志願していた。通っていた本所中学校の理科担当教師・宮川英夫氏の回想によれば、志望校を聞かれた際、王貞治はこう語っている。

「ぼくたち兄弟のように、国籍が中国にある者は、まともなサラリーマンになったって、せまい日本では肩身の狭い思いをするのがせいぜいです」「ぼくの兄貴はいま、慶大医学部に通い、やがて外科医になるといっています。だって兄貴のように、特殊な技術を見につけることが、ぼくたち兄弟の生きる道ですものね」

ただ、王貞治は医者にはなりたくないだけでなく、父の跡を継いでラーメン屋になるつもりもなかった。早稲田大学の理工学部に進み、エンジニアになって中国に行くつもりだった。宮川によれば、王貞治はこんなことを述べていた。

「エンジニアとして中国で精いっぱい、はたらけたらと思っています。宮川先生、中国は日本と違って広く、これからの国だし、それに父の故郷ですから」

結果的に王貞治は墨田川高校の入試に落ち、早実に入塾して甲子園のスターになる。墨田川高校には野球部がなかったので、王貞治が合格していたら、世界の本塁打王は誕生していなかっただろう。王貞治の生真面目な性格からして、勉強に励めば立派なエンジニアになったはずである。

子供たちと一緒に中国に帰り、「祖国」の発展に寄与するというのは父・王仕福の夢でもあった。この時の王貞治は、父の夢を叶えることを自分の夢としていたのかもしれない。中国と台湾に対する価値観はその後大きく変わってはいないようだった。王貞治にとっては、中国大陆も台湾も、どちらも「中国」であり、自分は「中国人」であるという意識が強かったと思われる。

王貞治に関する自伝的書籍は多数出版されているが、その中で最も信頼できるのは『王貞治一回想』（2000年、日本図書センター）という本であるというのが衆目の一致した見方だ。そこで王貞

治は自分の帰化問題についてこう述べている。

「現在私は、帰化しようと思っていない。もし私が日本に帰化するといえば、反対するものは一人もいないだろう。いや、父は寂しく思うかもしれない。だから、私は帰化しないのだ、といえるのかも知れない。しかし、現実には帰化しなくても不便なことは何もない。今まで不自由を感じたこともない。私の周囲では、帰化したものはたくさんいる。しかし、私は当分このままでいくつもりである。とはいっても、私にも私なりの愛国心はあるのだ」とさらに自らの内心に踏み込んでいく。

「父の祖国である中国と、母の祖国である日本、そして、私が父と母の血を半分ずつ分けて生まれた日本、どちらも私にとっては祖国である。その証拠に、中国という言葉、日本という言葉、そして、祖国という言葉を知りただけで、私の瞳はうるみ、胸の底から熱いものが込み上げてくる」

「父が、父の祖国、中国を愛していることだけは、私にははっきりわかる。だからこそ私は、父を悲しませてまで日本に帰化しようとは思わないのである」

ここで述べられているのは中国であり、台湾に関する言及は一切ない。共産党にも国民党にも触れていない。ただ、同じ本の別のところで「父は世の中が変わっても、誇らず愚痴らず、ただ黙々と働いていた。それは、頑固といってもいいほど自分に忠実な生き方だった。そんな父を見ていて、私は、たとえば、蒋介石の言葉の中にある、『徳を以って怨に報いる』というような中国的なものの考え方を自然に学び取っていたのだと思う」と書いている。

王貞治が政治人物について触れたこと自体、非常に珍しい。しかし、これとでも、文化的観点から蒋介石の言葉を紹介しているに過ぎない。

王貞治は、その一生のなかで、台湾問題について特定の立場を持たず、求められればできるだけ協力する、相手を喜ばすことに徹するという生き方を貫いている。日本の台湾系華僑団体からアプ



ローチがあり、次第に台湾の宣伝工作のなかで愛国華僑の地位に祭り上げられて行ったと思われるが、王貞治自身は、中国側から声がかかれば応じたし、台湾側から声がかかっても応じるという自然体のスタンスだった。時に激しい中台間の綱引きに巻き込まれそうになる時もあったが、最後は所属する巨人と読売グループの意向を尊重した。

### ● 「二流のスポーツ」から国技へ

振り返ってみれば、巨人軍の台湾キャンプと紅葉小の対日本戦勝利があった1968年は一つのターニングポイントであったかもしれない。

当時、台湾の中華民国体制は国連で五大国の地位にあったとはいえ、中華人民共和国の外交攻勢によってその国際環境は日増しに厳しくなっていた。絶対的指導者であった蒋介石も年齢からくる衰えは隠せず、反攻大陸のスローガンも虚しく感じられるようになっていた。そんな中、不安を抱く国民を勇気付け、国際社会に「中華民国あり」とアピールできる手段として、野球に白羽の矢が当たったと見えることもできる。

台湾における野球は、日本が残した「二流のスポーツ」から、中華民国体制の維持発展を背負った「国技」への転換が図られることになったのである。それは、野球というスポーツに対する政策的転換であったと同時に、台湾社会に対する政策的転換であったとも言えるだろう。

なぜなら、野球という「台湾的スポーツ」を重視するということは、それまでは中国由来の政権であった国民党体制が、台湾社会との一定の融合に舵を切ったことを意味するからだ。当時の蒋介石ら指導者がその点をどこまでクリアに認識していたかについては検証が必要だが、結果からみれば、その後、台湾が抱え込む「台湾」と「中国」のせめぎ合いのスタート地点は1968年だったと見ることもできる。いかに国際社会で野球によって台湾のチームが活躍しようとも、中国大陸の人

民は野球というスポーツにそもそも馴染みがなく、宣伝工作上、台湾の優位性をアピールすることにならない。つまり、野球重視という政策の意味するところは、とりもなおさず、国民党政権による台湾住民対策であったと言えるからだ。

もともと戦後の台湾における野球の位置付けは、大陸からきた中華民国体制にとって「私生児に過ぎなかった」と、台湾の歴史評論家、管仁健は述べている（2018.1.15 新頭殻）。

管仁健は、国民党政権の野球に対する冷淡さをこう表現した。

「第二次大戦が終わって四年後、老蔣（筆者注・蒋介石）は共産党軍に中国を追い出され、彼の政府と敗残兵を連れて台湾にやってきた。前にいた外来政権（筆者注・日本）が残し、現地の住民が熱愛するスポーツを避けて遠ざけた。台湾人の日本に対する歴史的記憶を切断するために、老蔣は大々的にバスケットボールを推し進め、野球を冷遇した」

総統府の前には「三軍球場」が建設され、台北駅の裏には「鉄路球場」が作られた。どちらも台北きっての一等地だ。球場といっても野球場ではなく、バスケットボール場である。そうした「球場」で、蒋介石の名前を冠した「介寿杯」や「自由杯」などの名前の大会が開催され、運営費は政府持ちで、官営メディアが盛んに試合の中継や結果を報じた。

一方、野球については「国レベル」のイベントはなく、せいぜいが「省レベル」で試合が開催され、いつの間にか「外省人看籃球、台湾人看棒球（外省人はバスケットボールを楽しみ、台湾人は野球を楽しむ）」という住み分けの言葉は市井では語られるようになった。

「国際環境の悪化、大陸反攻の希望が小さくなるに従い、蒋介石の後継として権力を掌握しつつあった蔣経国は、バスケットボールよりも野球の利用価値を認め、かつて日本の台湾総督府がやったように野球によって「全島一体」の求心力を作

り出そうとした」

管仁健はそう指摘している。

## ●台湾の「国技」として復活

1968年以降に起きたことは、日本時代に一度は台湾に根付いた野球が、今度は「棒球」として再び国技に返り咲くプロセスであった。復活した野球は、1970年代になると、権力と二人三脚で国際社会へ歩み出す。

先頭に立ったのは、台湾の少年たちだった。台湾には「三級棒球」という言葉がある。「少年野球（主に小学生）、青少年野球（主に中学生）、青年野球（主に高校生）」の三つのカテゴリーのことだ。

台湾野球の基礎は、戦後のなかで一度は失われつつあった。成人野球については、日本や米国と伍して戦えるほどの実力はない。子供ならば、短期間の集中的なトレーニングや戦術理解で、それなりに国際大会でも活躍できる。さらに、台湾には嘉義農林の伝統を受け継ぐ台東の原住民社会などの人材供給源もあった。

少年野球への権力の接近は、台湾で少年野球ブームに火がつく第二のロケットとなった1969年の世界大会優勝をめぐる諸現象に現れていた。

米国・ペンシルバニア州ウィリアムズポートで開催される少年野球世界大会には、本来、「第24回台湾省学童棒球大会」で優勝した嘉義の大同小学校が派遣されるべきであった。しかし、台湾から派遣されたのは「台中の金龍チーム」だった。台湾にはそもそも金龍という名前の小学校も地名も存在しなかった。当時、台湾の野球関係者は検討の末、世界大会で勝利することを目的に、嘉義の大同小チームのメンバーは4人とどめ、ほかには全国の優秀な野球選手を集めたオールスター形式で代表チームを作ったのだ。

世界大会の規定では、参加チームは地域限定のチームでなければならないというルールがあっ

た。厳密に言えば、台湾のチーム編成は規定に反しおり、参加は認められなくなる恐れもあった。そのため、選手はいったん台中に集められてキャンプを張って訓練を行ったうえで、少年選手たちの学籍をいったん台中市の忠孝小学校に転籍させ、「台中の金龍チーム」という体裁をなんとか「合法」すれすれに整えるという離れ技で世界大会に参加したのである。

世界大会の「地域限定」という規定について、台湾の野球界は知らなかった、という説明も当時なされているが、一連の流れをみていると、すべてが「国威発揚」の要求に応えるために、最強チームを送り出すことを目指してアレンジされていた可能性が高い。こうした台湾のきわどい参加方法はのちに複数の国際青少年大会で問題視され、大会参加を拒まれるトラブルになったこともある。

だが、このときは政治の思惑がぴったりと当たった。金龍チームは世界大会で期待以上の力を発揮して三連勝を果たし、見事、優勝を遂げる。当然のように国営メディアが動員され、台湾社会は紅葉小チームのときに続いて熱狂した。しかも、今回は正真正銘の国際大会での優勝である。1969年に中央通信社が選ぶ「国内十大ニュース」のナンバーワンには、この金龍チームの優勝が選ばれている。

翌1970年に同じウィリアムズポートの世界大会に派遣された嘉義の七虎チームも嘉義各地の7つの小学校の優秀な選手を集めたものだった。台湾メディアは大陣営を組んで取材に駆けつけ、在米華僑も応援団を送り込んだが、一回戦で敗退してしまう。だが、翌年に派遣された台南の巨人チーム（これも台南・高雄の優秀選手を集めたもの）が再び、世界一の座を台湾にもたらした。

巨人チームが活躍した1971年は、7月にはニクソン米大統領が「近い時期に、北京を訪問する」と発表して世界を驚かせていた。領有権を主張していた尖閣諸島も沖縄と一緒に日本に返還された。国連での残留も厳しくなっていた。

同年8月、グアムで開かれた極東地区代表決定予選で、台湾の巨人チームが日本の調布チームを破ったとき、中華日報は社説でこう書いた。

「この輝かしい勝利は、やはて巨人隊が、崇巖なる中華民国旗をアメリカ本土の上にはためかせ、われわれが『中華まさに青春、みずから強めてやまない民族』であることを示すだろう。現在、米国は北京に対して妥協的態度をとりつつあり、世の流れは将棋の駒のごとく、変化ははかりしれない。このようなとき、巨人隊の勝利は、国民に大きな希望をもたせ、優勝劣敗という重大な教訓を与えた。みんな巨人隊のように努力すれば、われわれはいつか最後の勝利を得ることができる」

米中関係の奔流に飲み込まれようとしている台湾の民意を落ち着かせるため、少年野球の活躍は、なによりも重要な材料だったことがうかがえる。

ちなみに、世界最大の自転車製造メーカーであるGIANTの社名は、劉金標会長（当時）への私のインタビューによれば、1972年の創業当時、当時少年野球で活躍する巨人チームからヒントを得て命名された、という逸話がある。それぐらい、台湾社会では「巨人」という名前は通りが良かった。

「三級棒球」はすっかり台湾のお家芸になった。世界大会で少年野球は1969年から1996年までに合計17回の優勝を遂げた。青少年野球は同じ期間に16回の優勝。青年野球でも17回の優勝と圧倒的な実力を発揮した。1974年、1977年、1978年、1988年、1990年、1991年の6回にわたって三階級を制覇する「三級棒球三冠王」を台湾は成し遂げている。この時期、アマチュアの青少年野球といえば、台湾が世界をリードした時代だった。

### ●郭源治、呂明賜、大豊の共通点＝華新出身

そのなかでも、台湾青少年野球隆盛の流れを作った1969年の金龍チームほど、戦後の台湾野球史のなかで数奇な運命をたどった存在はない。

この金龍チームに所属する選手の中には郭源治がいた。彼は台東の少年野球チームの一員だったが、選抜選手に選ばれて金龍チームに加わった。当時、金龍チームには陳智雄という絶対的エースがおり、郭源治は高い運動能力を活かして俊足巧打の外野手兼二番手投手として活躍していた。

この郭源治はのちに中日ドラゴンズに加入したが、ほかにも巨人の呂明賜、中日の大豊を覚えている人も多いだろう。1980年代から1990年代にかけて、日本野球界を席卷した彼らには日本ではほとんど知られていない重要な共通点があった。

それは彼らが「華興」の出身者であることだ。華興は、台北・陽明山にある中高一貫の私立学校である。台湾プロ野球で活躍した華興出身の選手も多い。野球に強い大阪桐蔭やPL学園、東海大相模などのような野球名門校というだけでなく、台湾における「野球の国技化」において決定的な役割を果たした国策学校だった。

その中心にあったのが、蒋介石の妻・宋美齡である。

華興の成り立ちは、国民党の命運と深く関わる。国民党の台湾撤退の際、最後の激戦地となった大陳島。共産党に占領された島から、戦災孤児を含んだ大勢の島民が台湾に渡ってきた。大陳島出身者は台湾各地で小さなコミュニティを作っていた。一方、パワフルな組織として知られる華興育幼院の主任であった宋美齡が孤児たちを収容するために、「私財を投じて作った」とされるのが、華興育幼院（当初の名称は光華育児院）だった。

『華興棒球50年』（2019、華興棒球校友會）によると、1955年の設立当初は保育園、幼稚園、小学校だけで、孤児らの成長に伴って1958年に中学部、1969年に高等部が作られた。収容対象は次第に大陳島出身者から他の戦災孤児や病気でなくなった外省系子弟、タイ北部の国民党支配地域から渡ってきた子弟まで含まれるようになった。



基本的に全寮制で学費も免除とされていた。ちなみに、校名の華興は、孫文らが設立した中国革命同盟会の母体の1つになった華興会にちなんでおり、学校の場所も国民党の諸施設が置かれた陽明山であった。

世界大会で優勝を遂げると、この金龍チームの所属選手全員が、なんと華興の中等部に全員入学することになった。これは台湾では当時美談として紹介された。曰く、多くの選手たちが家庭の経済的困窮のため野球を続けられなかった、という話である。しかし、実態は必ずしもそうではなかったようで、野球の実績の有無が選手受け入れの条件になったとみられる。翌年の代表チームの七虎、翌々年の巨人などもほとんどの少年選手が華興に入学している。

郭源治は著書『熱球』（1997、ザマサダ）のなかで、「せっかくこれだけ盛り上がった国内の野球熱をなんとか持続させるため、何とか金龍隊を解散させずにおくことはできないものかと、文部省や野球関係者が集まって相談していた。そして、その考えに賛同し、メンバー全員をまとめて面倒みようという人が現れたのである。その人こそ蒋介石総統の夫人である宋美齡女史であった。宋先生は自らが理事長を務める華興中学へ、僕ら十四人全員を入学させるだけでなく、学費、食費等一切免除の特待生優遇で受け入れるという破格の条件を提示してくれた」と野球特待生であったことをはっきりと書いている。

華興の初代野球特待生となった十四人のうち、エース格だった陳智雄をはじめ十三人は高校卒業後には野球を続けておらず、郭源治だけがプロ野球選手となった。郭源治の家庭が経済的に恵まれていなかったのは確かで、のちに大学に進むときも輔仁大学に学費免除で入学し、その際も宋美齡のサポートがあったことも郭源治は回顧している。

筆者が郭源治に数年前にインタビューしたとき、日本で帰化するにあたって郭源治が台湾で受

けた「恩義」を裏切ることにならないかと心配になり、宋美齡に直接相談を持ちかけたことがあったと教えてくれた。その時に宋美齡から「あなたの人生だから好きなようにやりなさい」とアドバイスを受けて、日本への帰化を決意できたという。台湾の少年野球選手たちにとって、王貞治が父ならば、宋美齡は母のような存在だったのかもしれない。

華興は台湾青少年野球界の主役として圧倒的な陣容を持ち続けた。集められた選手は事実上、台湾の有望な野球少年の半数を網羅していたとも言われている。

### ●日本野球へ照準

台湾は確かに青少年野球で世界レベルの選手たちを育成し、強大な陣容を持つに至った。しかし、台湾においては、プロ野球リーグはなく、企業チームを中心とするアマ野球がその最高峰という形になっていたが、人気・実力ともレベルは高いといえず、育成された優秀な選手たちの実力に見合った活躍の場が、成人してから見当たらないという厄介な問題に直面することになる。そこで始まったのが台湾選手の「国際輸出」だった。

それまでも、日本のノンプロなどに台湾選手が活躍の場を求めて渡ったことはあったが、プロ野球選手では、戦前から戦後にかけて巨人・阪神などで主力選手として活躍した嘉義農林出身の呉昌征、同じく巨人で盗塁王に輝いた呉新亨、花蓮出身で平安中学に留学し、そのまま日本で野球を続けた岡村俊昭（葉天送）などがいたが、その後は途絶えていた。

ただ、日本への選手「輸出」が実現するまでは1980年代を待たねばならなかった。その理由の一つは、台湾の少年野球の育成システムが、郭源治ら第一世代の成長にともなって整備されていくまでに、なお十年の時間が必要であったこと。そして、1970年代の台湾ではまだ愛国教育が盛ん

に行われており、日本は日中戦争で戦った敵国であると同時に台湾を不当に植民地統治した存在であり、「抗日」が社会共通の価値観として生存しているという問題が残っていた。例えば、1970年代初頭、台湾のアマチュア成人野球に陳秀雄（1943-1988）という選手がいた。1971年の国際大会で台湾代表チームのエースとして日本代表チームから12奪三振を奪って完封。陳秀雄は日本に勝利したことで台湾メディアからは「抗日英雄」と呼ばれた。アンダースローから繰り出されるホップする速球や鋭いカーブを駆使する能力に驚いた日本側は西鉄ライオンズが当時29歳だった陳秀雄に契約を申し出ようとした。

1972年9月、日本は中華人民共和国と国交を樹立し、中華民国と断交し、台湾では反日プロパガンダが繰り広げられた。中華民国体育協進協会の理事長を務めていた楊森（1884-1977）という人物が反対に動き出す。楊森は元国民党の大物軍人であり、日本との実戦経験もあった。同年12月、台湾代表チームの一員として海外遠征から戻った陳秀雄を台北の松山空港でわざわざ出迎えた楊森は、「日本のライオンズに行かないだろうな」と念押しを行い、陳秀雄は泣く泣く期待していた日本行きを諦めたというエピソードが残っている。

この陳秀雄はそれで野球の第一線にいることに嫌気がさしたのか、若くして引退する。そこで加わったのが華興中学の野球部であり、投手コーチとして後進を育てるのである。

陳秀雄の華興における教え子として、戦後世代で最初に日本に渡った選手は、李宗源（1958-）という選手で、日本名では三宅宗源とう名前の方が覚えている人も多いだろう。身長180センチを超える長身のサウスポーの速球派で、出身地の嘉義から中学校に進学するときに華興に入学した。当時、日本プロ野球も台湾にアンテナを向けるようになっていて、ロッテの三宅三（1921-2006）スカウトは、日本に対して、李宗源や郭泰源が日本でも活躍が期待できる人材として獲得を打診

し、結果的にサウスポーで「台湾の速球王」と呼ばれた李宗源が選ばれた。

当時の日本プロ野球の外国人枠はたった2人。ロッテにはリー兄弟など有力な外国人選手がおり、三宅は李宗源を自らの養子として日本籍に変えて日本に連れていった。しかし、李宗源はロッテでの3年間でわずか5勝にとどまり、巨人にトレードされたが試合出場はなく引退した。コントロールの弱さが解決せず、高い素質を開花させることはできなかった。

一方、華興出身者で日本プロ野球における最初の成功者となったのは郭源治である。大学卒業後、兵役を経て、1981年に中日に入団した郭源治は、最初は先発、のちにストッパーとして頭角をあらわした。李宗源の活躍が見られなかっただけに、台湾社会も郭源治の活躍には高い関心を払った。当時の日本野球界では、いわゆる外国人の助っ人選手は打者が主流だった。三冠王に輝いた阪急のブーマや阪神のバースなどがその代表格だ。一方、台湾の選手は主に投手として活躍することになる。それはあたかも日本出身の大リーガーが野茂英雄に始まり、松坂大輔、ダルビッシュ有、田中将大と続いていった軌跡にも似ている。

郭源治の次に日本に渡った台湾選手は、1984年のロサンゼルス五輪で台湾が銅メダルを獲得することに貢献した郭泰源（1962-）だった。西武と巨人の壮絶な獲得交渉の末に西武に入団すると、150キロの速球と高速スライダーを武器に、1985年の1年目からノーヒットノーランを記録するなど大活躍する。同じ年に莊勝雄（1959-）もロッテへ入った。莊勝雄も正確なコントロールと巧みな投球術でローテーション入りを果たして一年目から活躍。郭源治、郭泰源、莊勝雄の3人は台湾で「二郭一莊」というトリオとして名前を残した。

投手の次には打者も活躍した。華興出身である大豊泰昭（1963-2015）と呂明賜（1964-）である。1988年に中日に大豊が加入し、巨人に呂明賜が



加入する。このころ、スポーツ雑誌は台湾野球特集を盛んに掲載し、台湾が日本野球の人材供給地として評価が定着したのもこの時期だった。郭源治は1988年に星野仙一監督のもと抑えの切り札として37セーブをあげて台湾出身選手として初めてMVPを獲得する。郭泰源も当時最強だった西武でエース級として活躍を続け、1980年代後半から1990年代前半にかけては、台湾選手の黄金時代だった。

彼ら台湾選手がこの時期にそろって日本プロ野球で活躍したことは決して偶然ではなかった。台湾のナショナルチームが国際大会や五輪などで最も強かったのも基本的には同じ時期であった。1970年代の台湾の国をあげた少年野球の育成ブームに乗って育てられた人材が、青年から成人になっていくプロセスと一致しているからだ。台湾野球の勢いが落ちてきたのは1990年代の後半から。台湾における少年野球への「投資」はすでに一段落しており、最強を誇った台湾の青少年野球も国際大会で優勝することは減っていた。台湾からはその後も、チェンや陽岱鋼、林威助など優秀な選手が日本に渡っているが、かつてのような圧倒的な存在感は失われている。

## ●王貞治への憧憬

同じ華興出身者である郭源治、大豊、呂明賜の3人の間で完全に共通しているのは、冒頭に紹介した「英雄」王貞治への隠せぬ憧憬である。

郭源治は著書『熱球』のなかで、金龍チームの一員として世界大会で優勝した後、台湾に帰る旅の途上、日本に立ち寄って王貞治選手と面会したときのことをこう記す。

「僕たち十四人のメンバーは、当然のことながらみんな考え方も性格も違っていた。だが、ただ一つだけ共通点があった。それは王選手に憧れ、英雄として尊敬していたことだ」

東京で開いた戦勝祝賀会に王貞治が現れ、翌日、

後樂園球場に招待されることになった。王貞治は少年たちに「明日、また後樂園球場で会おう。キミたちにホームランをプレゼントするからね」と語りかけた。実際に翌日のホエールズ戦で王貞治は本塁打を放って、郭源治は「いつか自分もこんな大観衆の前でプレーし、球場を沸かせることができたら・・・。」との思いを抱く。

『大豊 王貞治に憧れて日本にあってきた裸足の野球少年』(2004, ソフトバンクパブリッシング)という著書のある大豊も、少年時代に監督が「生意気な選手は使わない。たとえそれが世界の王貞治であろうとも」といって他の選手を叱っていることを耳にし、中学校のときは王貞治が世界記録の746本目の本塁打を放ったことを封じる雑誌の記念号をみて、「日本に行きたい。日本に行けば王選手に会える」という気持ちを持ったことを回顧している。大豊はのちに王貞治の代名詞でもある一本足打法で本塁打を量産する長距離打者となり、中日に入団するときは、王貞治の年間最多本塁打の55本にちなんだ55という背番号を受け取った。一本足打法の習得においても、ジャイアンツを引退して解説者であった王貞治から直接指導を受けるなど、大豊ほど王貞治と実際に結びつきをもった台湾選手もいない。

呂明賜も、王貞治とは浅からぬ縁を結んだ。1987年に巨人に入団したときも、日米の各球団からの誘いを蹴って王貞治監督時代だった巨人を選んだ。最初は外国人枠二人の壁で二軍生活が続いていたが、クロマティの故障で昇格するといきなり猛烈に打ち出し、9試合で7本の本塁打を放って、呂明賜ブームが巻き起こった。だが、オールスター戦の後は調子を崩してしまい、活躍も続かなかった。巨人は二位に終わって王貞治は監督から退き、それから3年の間、呂明賜は一軍と二軍を行ったり来たりとなってしまった。

技術的には内角球が苦手でそこを厳しく攻められて対応ができなかったことが原因と言われた。だが、当時、呂明賜にはアジアの大砲の名前が冠

され、王貞治の後継者の本塁打打者がとうとう巨人に現れたという感覚で日本中が期待し、逆に王貞治二世のプレッシャーに本人が押しつぶされてしまったという見方もできる。王貞治は、台湾から日本に渡った選手にとって、決して逃れることのできない巨大な太陽だったのかもしれない。

### ●一本の糸でつながる日台野球

王貞治という英雄は彼らを野球にまい進させる動機となり、同時に、日本のプロ野球で成功する台湾ドリームの一部となった。その彼らを育てあげる国家機械が華興学校であり、その背後には、宋美齡に象徴される国民党の体制があった。日本精神を象徴する「野球」が、台湾＝中華民国の国家的スポーツ「国球」となり、選手たちは「国手」と呼ばれ、国際社会で優秀な成績を収めることが目的となっていたのである。

1990年代に入ると、台湾でプロ野球リーグが発足する。そこには、海外に選手を供給するだけでは、台湾選手の力を十分に活かしきれていないという批判があり、国内でも一流の選手の活躍をみたいという庶民の求めが後押ししていた。台湾選手の海外挑戦の動きも途絶えることはなかったが、国内でも野球によってかなりの栄光をつかめることになったなかではかつてのように日本に行くことが成功のすべてとは言えなくなった。

李登輝新体制のもと、台湾の民主化が動き出し、宋美齡ら蔣家の影響力も弱まり、華興での野球エリート育成も下火になっていく。一方で、日本から台湾のプロ野球に活路を求める選手も増えていく。渡辺久信や中山裕章、正田樹、中込伸など、台湾で一定の成績を残して監督まで務めた者もいる。日本で活躍できなかった選手が復活の機会を掴んだり、あと一花咲かせたりする場所として、台湾プロ野球を目指す日本選手は、韓国プロ野球よりもずっと多い。そこには日台間の目に見えない距離の近さが関係しているのは間違いない。

こうしてみると、1960年代の王貞治の英雄化、1970年代の台湾青少年野球の国際的活躍、1980年代の台湾選手の日本進出という30年間は、台湾戦後史のあゆみを映し出す鏡のようなものだという印象を持たざるを得ない。

このプロセスを経ることによって、日本時代に埋め込まれた野球のDNAは、日本や中華民国という「外来政権」に利用されながら、台湾社会のなかに「棒球」を根付かせるに至ったのである。

いま、台湾野球では、日本式の高校野球甲子園大会である黒豹旗大会が定着している。甲子園に憧れ、日本の高校に野球留学で渡ってくる台湾の高校生も少なくない。台湾プロ野球は台湾の新型コロナ対策の成功のおかげで日本のプロ野球や米メジャーリーグなどよりも正常運営に早く戻っており、活気を取り戻している。そこに日本の楽天が参入したことも日台野球交流にとっては明るいニュースだ。

本稿で3回にわたって取り上げてきたように、日本統治時代の花蓮での原住民野球チーム能高団の結成に始まり、平安中への野球柳月、嘉義農林の甲子園準優勝、台東で受け継がれた嘉義農林の伝統、紅葉小チームの活躍、王貞治の英雄化、少年野球の隆盛、台湾選手の日本選出という流れをみれば、百年にわたった日台野球交流史は完全に一本の糸でつながっている。

お互いの運命を交錯させながら、時には同胞として、時には敵味方に分かれて野球に向き合ってきた日本と台湾であるが、その歴史はなお断片的な理解にとどまっており、国際スポーツ交流史としては歴史や政治を絡めながら十分に立体的、体系的には描き出されているとはいえない。筆者としては、今後、当事者たちからのヒアリングと資料収集を進めながら、交流に掲載させていただいた本稿（前・中・後篇）を基礎にさらに内容をふくませ、数年内に日台野球交流史に関する包括的な著作を完成させることを目指していきたい。